

目的 染色堅ろう度の判定法に肉眼による方法と光学器械による方法があり、測定の簡便さから前者の方法を用いる場合が多い。しかし肉眼による方法では判定時の環境条件や色相に左右され易く判定値にバラツキや誤差が生じやすい。そこでその原因の解明を目的として染色堅ろう度試験を行ない判定方法の違いによる判定値の差異について2・3の検討を試みた。

方法 色相の異なる12種類の染料により染色した綿布の洗濯堅ろう度試験をJIS L-0244に準じて行ないその結果に対して肉眼による判定方法と光学器械による判定方法により判定を行なった。前者の方法として本学学生が変退色グレースケールと比較して評価した。後者の方法として測色色差計(日本電色工業、Z-1001 DP型)により測定して求めた色差を変退色用グレースケールのAdams-Nickerson 色差と寺主¹⁾が示した色差と色票との関係図により色票に換算し求めた。

結果 肉眼による判定値が光学器械による測定換算値と比較して相対的に1段階甘い判定結果を示している。しかし ΔE と ΔL の差が等しいか又はその差が小さい場合、および ΔE と ΔL の差は大きい Δa , Δb は(-)値すなわち青みを示すと肉眼による判定値と光学的判定値は良い対応を示した。しかしながら Δa が(+)で Δb も(+)を示す場合、 Δa は(+)で Δb が(-)を示す場合すなわち黄の度合いが大きい場合および紫・赤の度合いが大きい場合には肉眼による判定値と光学的判定値に2段階以上の差が生じた。またその時の肉眼による判定値間には大きいバラツキが生じた。

注1) 寺主一成：織学誌 Vol.36 T-261 (1980)